

鶴来たる

山田真砂年

草蜉蝣草の色して流れきし
秋の蟬オーイミンナハドコニキル
蕎麦の花西へ向き変ふ風見鶏
きりぎりす真闇に富士の確とあり
つれなくも蒲の穂綿の絡みをり
盛塩にうすき影あり秋灯し
羊飼ひ露の干るころ飯食うて
虫の音や生絹すずしの闇をふりしきる
ほろほろと雲の崩れて秋来たり

関ヶ原二句

秋天に日矢の三柱みはしら関ヶ原
秋風の自在や東西陣地跡
亜流の亜流群れて揺れをるねこじやらし
秋の噴水ひねもす音を立ててをり
油気の抜けてかろやか芒の穂
数珠玉の白きばかりが風の中
上品じょうほんも下品げほんも曼珠沙華真つ赤
ぬつと出て鯉の大口柳散る
虚子庵へ紫苑の径を上りけり
小鳥来る見知らぬ街の理髪店
点は線線は形に鶴来たる
稻ザクと刈つて浮世をはなれけり
熟柿落つ怒りはここに破裂せり
園児らのつぎつぎ木の実見せくれし
アルプスへつづく傾斜や草紅葉
银杏を拾うてきたる人のをる